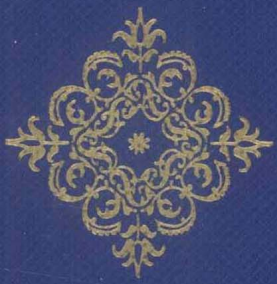

A TREASURY OF JAPANESE LITERATURE

# 日本の文学

52

尾崎一雄
外村　繁
上林　暁

中央公論社

日本の文学　52

©1969

尾崎一雄
外村　繁
上林　暁

昭和44年12月5日初版発行
昭和48年7月30日4版発行

発行者　山越　豊

本文整版印刷　三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷　株式会社トーブロ
色刷口絵印刷　株式会社大熊整美堂
口絵写真印刷　株式会社トーブロ
本文用紙　本州製紙株式会社
クロス　日本クロス工業株式会社
製函　加藤製函印刷株式会社
函ボール　佐賀板紙株式会社
製本　協和製本株式会社

発行所　中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代)　振替東京34

# 目次

尾崎一雄


暢気眼鏡　7
父祖の地　21
虫のいろいろ　29
美しい墓地からの眺め　39
すみっこ　52
まぼろしの記　119
退職の願い　168

明月記 424
小便小僧 445
晩春日記 453
聖ヨハネ病院にて 467
開運の願 493
注解 507
解説 三島由紀夫 516
年譜 529

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongboo

明月記 424
小便小僧 445
晩春日記 453
聖ヨハネ病院にて 467
開運の願 493
注解 507
解説 三島由紀夫 516
年譜 529

## 口絵

「暢気眼鏡」　大貫松三

## 挿画

「暢気眼鏡」「虫のいろいろ」
「美しい墓地からの眺め」「すみっこ」「まぼろしの記」　大貫松三

「鵜の物語」「落標」「日を愛しむ」　稗田一穂

「ちちははの記」「野」「二閑人交游図」「明月記」「聖ヨハネ病院にて」　中山巍

尾崎一雄

# 暢気眼鏡

## 一

「ちょっとオ」とか「これよ、これ」とか云う芳枝の声を、「うるさいな」と思い思い私ははっきりせぬ夢から抜けきれずにいた。が、すぐ覚めた。朝だ。芳枝が、薄眼で呆然している私の鼻先に何か光るものを突きつけて、「これ」

「何だ」見ると金色の妙な恰好したものが、私には何か判断がつかなかった。

「これ、ちょっと壊れてるし、あると歯が痛いから除っちゃった」

入歯の金冠だなと思うと、私は全く眼が覚めむっくり起き上ろうとしたが、止めた。ちらと芳枝の顔を見やり、夜具を鼻の辺まで引き上げ、また眼を閉じてしまった。私にはちょっと何も云えなかった。「態を見ろ」と何かに云われていると感じ、「判ったよ」と反撥的に頭の中であたりを見廻すのだった。するといろいろの顔が浮ぶ。「死ね」と泣きながら云った母。「元の兄さんに返って下さい」と手紙をよこした妹——すでに四年も見ない顔だ。一月ほど前、雑司ヶ谷にいる芳枝の姉に、自分たちのことを事後承諾させに行った時、「承知不承知なぞとわたくしにはもう——。ただ、あれは一人の妹ですから、先先人並の生活だけはさせてやって頂きとう存じます」と云われた、その姉の教師らしくないやさしげな眼つき——「もういい、もういい」と苦笑いするのを追いかけて「俺もいるぜ」と顔を出したのは友人のSだ。一週間ほど前、金借りに行ったがたびたびのことで断わられ、私がふくれ面しているとSが改まった顔つきになり、「君はどうしても僕とこから持って行くつもりかね」とゆっくり云った。私は全然居直った形でSを見返すと、「為方がないんだ」とふてぶてしい声を出した。Sは、蒼い顔でしばらく黙っていたが、「じゃあ、為方がない」と云うなり立ち上ると押入れをガタンと開け、行李の中から和本二三冊取り出して私の前に置いた。

「足りまいが、これをどうにでもしてもらおう」

手にすると、*国芳あたりの春画本だ、私はそれを膝の前に置き、しばらく考え込んだ。やがて割に平気な顔で「ありがとう」と云った。が云ってしまうと、不意に激しい感情に襲われた。図太い張りが消し飛んでしまった

のだ。
「僕は、どんなに恥を掻いても、今、為方がないんだ。絶対に今金がなくてはいけないのだ。出来れば泥棒でもする。君に云ったところが判りっこはない、君がそっくり今の僕になって見ない以上は。だから、腹でどんなに罵倒されていようと僕は関やしない。その覚悟は初めからしているんだが――」云っていると、眼前のSを忘れ、自分だけの感情から意気地ない泪を浮べてしまった。Sがその時どういう顔をしたかは覚えぬ。後で碁を打ち、双方気持を取り戻して別れたのだが……。

芳枝が、
「これエ、要らないんだけど――どうする？」
「どうするったって――」と向き直ったが、この場合怒った風をするほかないと思われ、
「なぜ君はそんな莫迦なことをするんだ。その歯、そんなにして、当分治せるあてはないじゃないか」怖い顔をして見せた。芳枝は気押された様子だったが、まだ私の気持をうかがう風は捨てず、独言のよう、
「これ自分で売りに行って、ドラ焼買おう」と云った。私は返事をせず、なおもみじめな自分の気持を小突き廻していた。昨日の夕刊に、ある時計店の広告ビラが折り込まれていて、金大暴騰、一匁に付き純金いくら十八金いくら、今が売り時、とあった、それを見ての思いつきに違いない。自分の喜ぶことを予定している様子なのが気にくわなかった。あるいはそれはも一つ屈折して、自分の気持を軽く運ばせようとした芳枝の心遣いかも知れぬ。それならさらに不愉快だと思った。二十やそこらの子供にいたわられてはたまらぬ。やはり持ち前の単純暢気さから、金なくてむっとしている自分を喜ばせる気でやったことだろう。この方なら気に喰わぬながらも、この場合負わされるところまだ多少軽くて済む。――しかし可哀そうな奴だ、と主我的な気持に余裕が出て来た。そう思うと、気持はずっと芳枝の方に流れ、私はまた違った意味で弱りきった。顔つきを柔らげて、
「ない方がいいんなら除っちまってもいいけど、あとどうかな。だけどもう片方のやつはこわれてないんだから、また俺の寝てる間に除ったりしちゃ駄目だぜ、今度は本当に怒るよ、いいか」
「うん」と急に嬉しそうな芳枝の顔を残し、も少し寝ると夜具を頭からかぶった。
午近く行きつけの質屋へ出かけ、金冠を見せると十八金七分ということで、四円いくらかになった。溜まっている利息にくれと云うのを持ち帰って第一に米を買った。かつて聞いた、貧乏しきって何もかもなくなり、金歯を入質して米を買ったが、それを喰う段になり弱ったという笑話が苦々しく憶い出された。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

## 二

芳枝と知り合う前のことを簡単に書く。

三年ほど一緒にいた妻Eと、私に収入のないことから不和になり、加えて郷里の母との間の鬱積した関係が極度に達した時、何もかもが面倒になって私は不意にN市へ走った。N市には私の尊敬する芸術家がいるのだ。N市へ行ってその人の顔を見、声を聞いたら切れそうな呼吸も落ちつこう、ただそれだけの望みしかなかった。Eは行く先を知っていたが、郷里では知らず、のち使いの者がEの所へ来て判った。母はあきらめ、一つには行き先が先ゆえ多少私の気持も考えたらしく、後追うのを止めた。云い忘れたが、私は父が早死した家の長男で、老いた母と三人の弟妹を世話しなければならぬ身の上なのだ。家計のやり方について母から不服を云われ、言われて見て自分も悪い点を認めたが、母がそれのみ責めたことから私はつむじを曲げた。そして現実に家の経済は破局に近づき、それを捨ておいてのN行きだった。

N市に居着いて、気持では郷里のことからかなり離れることが出来た。行くところまで行ったからだ。が、妻に関してはまだ処理しきれなかった。N行きに際し、私はKという友人に「あとを万事お願いする」と云いおいたのである。それを云う時、卑怯かな、と多少思った。が、止むを得ないのだとも思えた。Kは私にもEにも古い友だが、一時互いの居所の距たりから行き来間遠のころがあった。その間に私とEとの間はひどい不和になっていた。Eが以前やっていた商売をまた始めると云い出し、私も賛成して市内の旧居に帰ってからは、Kもよく来て世話を焼いてくれたが、第一に私とEとの不和に驚き心配してくれた。粗暴な私は、すでにそのころ口で云うことを止め、Eをよく殴った。ある時はEの左鼓膜の破れたのに気づかず、翌朝鏡に向って、かわいた血に驚いたことがあった。KはEに同情した。それがだんだんと育って行き、Eもそれを感じ始めたと知ってから、私はあまりEを殴らなくなった。そして、私とEとの間は冷えきってしまったのだ。

N行きの支度のことでEと気まずい口をきき合った時、私は顔は真面目に、冗談らしい調子で、「俺が行ってしまえば勝手にしていられるんじゃないか、まアふくれるな。俺は鉾をおさめるぜ」と声だけで笑った。

「何おっしゃるの」Eは云ったが、私は云う顔つきを見ようともしなかった。Kにはああ云ったし、これで片づこう、そう思った。

N市の、現実に妻の顔見ぬ生活では、Eに対して巻ききったと見えた私の気持にも、予想通り多少のゆるみが来た。Eを哀れな女と思えた。が、二三カ月して私の動

揺も静まった。八ヵ月目に帰京し、すぐ妻との間を決算した。EはKの妻になり、郊外に家を持った。

三

一人になって一年後、昨年の夏、K市から始めて東京に出て来た芳枝と知り合い、一ヵ月のつき合いの後、事実上の結婚をした。

私に母や弟妹を捨てさせ、妻を去らしめたのは直接には金の問題だが、根本は私が小説を好くことにある。私としては普通の世渡りの成りがたいほど元来偉くも莫迦でもないと密かに思っているのだが、いつか小説好くことの深みに陥り、父の遺産がなくなって気づいた時は遅かったのだ。世を渡る術の足場はまるで失い、余裕あるころその方向への心構えは捨てて顧みなかったゆえ、あらゆる意味の空手で、追われても走る気力のない野良犬、まずそんなものだ。一人になった時、それでいいと思った。もとよりなかなか気に入ったものが書けるとは思わず、書けてもそれで世間並にやって行く望みのないことは前からの覚悟ゆえ、自分一人で困っていれば済むと気楽だった。再び結婚はすまい、腐れ縁の古女房がいるのだと小説のことを考え、事実N行き以来書けそうに思えて来たのであった。

芳枝に好意を持ち、芳枝の肚も判った時、私は当然躊躇した。しかし、それを飛び越えてしまった。芳枝のすなおに示す感情の美しさに挫がれたのだ。が、一方、またこの女を苛めるのかと自分を咎めぬわけにゆかなかった。その気持は、芳枝が若く、何も知らぬ暢気な娘と思えたゆえ、強く来た。

四

いる所は汚い下宿の六畳で、机、本箱、空箱筒を並べ、コンロを廊下の隅に置いて自炊生活だ。宿主は、為事が片づけば纏めて払うからとの私の言を信じきれぬらしく、食事持って来ることを断わったのだ。宿には相当額の宿料が溜まっていた。自分は今、何もせずにいるのではないから少しは余裕を見せ、落ちついて為事をさせてくれぬものかと、多少腹が立った。いくらでもと入金をせめ立て、食事を止めてその日の米を得るためにあちこちと駈け廻らせるのでは、結局為事は遅れて互いの損ではないか、そう云ってみても、「うちも困っていますから」と相手にしない。いらだちと奔走とで、事実なかなか為事は捗らなかった。その為事はある全集物の一部で、遅れるほど損であることはよく判っていたのだ。

五

ひどい生活の中で芳枝が割に暢気でいることは、現在

助かると思いながら私としては一方絶えず追い立てられる気持だった。この暢気さがいつまで続くか、ゴム糸が延びきったらそれでおしまいだ。そうならぬうちにと、平気な顔の奥で焦り続けている私のそばで、暢気な芳枝は暢気なお饒舌りばかりする。ことに好んで幼時の話をする。今の惨めさに追われて意識せぬながら憶いが暢気だった昔に返るのかとも思われ、私は気が沈むのだった。云うことはまるでたわいなく、多くの場合相槌ばかりで私は何も聞いてはいないのだが……。

——五つの時、赤い着物を着ていたため、七面鳥に追いかけられた、それ以来その着物を七面鳥のおべべと云った。花を取ろうとして河へ陥ち、通りかかった郵便配達夫に助けられた、その時の着物が河のおべべ。新井白石は三つの時、屏風に天下一と上手に書いた、と幾度も母親から聞かされ、張り立ての襖に大きくそう書いて母親を呆れさした、六ッ。——その翌年父親に死なれた。

「……今生きていると七十。あたしの覚えている恰好だって、おじいさんだった。碁を打って、赤い毛氈の上で字を書いて、夜はお酒を呑んで、うすいお膝をしていつも坐ってた。おかしいことがあるの」——上、下と、二つの便所があるのに、父親は庭の隅に置かれた桶に小用を足す。四つぐらいの芳枝が必ずついて行ってそれを覗こうとする。父親は叱って、やがて帰って行く。いつもいつも桶に浮ぶ泡が不思議だ。「——ええそれ、お父さん肥料にすんのよ。庭の隅にほんのちょっぴり茄子と胡瓜を自分で植えては育てていたの。もう情けなアいのが、数えるほどっか生らないの。そのこやし、自分のおしっこでないといけないんだって、他人のは汚いんだって——」厭なお父さんと芳枝は笑いころげるのだが、私にはただ何かしゃべって笑う芳枝がおかしかった。私は芳枝のおしゃべりを素通りさせ、勝手に自分だけの思考を追う。次のようなことを憶い返している。——

## 六

二ヵ月ほど前、急な宿料の催促にいたたまれず、この宿を逃げ出したことがあった。金策に出て来ると立ち上る私をつかまえて離さず、一人ここにいるのは厭やと泣き出した。連れて出かけたが、今日いくらでもと云うのがもとより出来るあてはなく、夜になった。宿の方向へはすねた馬車馬のように動かぬ芳枝を連れて、ある友人の下宿へ行った。

私だけが上ると、三階の汚い四畳半で、若い貧乏な友人が、「やア」と起き上った。今夜泊めてもらいたいと私は云った。

「いいとも。芳枝さんは？」

「玄関にいる。あいつも頼む」

「ああ。いよいよ夜逃げか」
「そんな形だが、荷物は一つも持ち出してない。そのつもりでなかったんでね」
「明日行って、知らん顔でちょっとしたもの持って来るんだね。——とにかく下へ行って蒲団借りて来よう」
「じゃア、ついでに芳枝に上れって云ってくれ」
「ああ」と降りて行ったが、しばらくして戻って来ると、妙な顔で、芳枝がいない由云った。どうしたことか見当がつかず黙っていると、
「捜して来ようか」と友人が多少せき込んで云った。あいつ大分興奮していたがと思い、私はちょっと不安になった。が同時に何となく腹が立って来た。
「そうだね——今にやって来るだろう、ほかに行く所はなし……」考えていたが、やがて三階の窓際に立つと私は十二時に近い真黒な外に向って、
「芳兵衛、早く来ないか。来ないと、もう知らないぞ」と怒鳴り、思いきりの大声で「莫迦」と云った。しかし、返事はなかった。前の原を隔てたある大学の野球部合宿の建物が闇の中から「莫迦」と木魂を返して来た。私はひどく腹が立ち、自分の顔の蒼くなるのが判った。友人が、
「——しかし、ほかに行くところがないんだからなお……」云いかけるのを、
「いいんだ。癖になる、いよいよ来なければそれでおしまいさ。とにかく寝ようか」
「寝ようか」友人は芳枝の床もつくってくれた。それを見ると今さらに困ったと思った。
三十分ほどして、階段を上って来る音を聞き、私には芳枝と判った。大跨の足音が障子の外で止まり、「今晩はア」間のびした声だ。「どうぞ」答えながら、友人が起き上った。腹の底に湧き起った安堵の気持を圧しつぶして、
「どこをウロついていたんだ、莫迦」私が云うと、「うう。ここ開けてエ」と足で障子をガタガタやっている。友人が開けると、
「今晩はア。ああ重かった」両手にかかえた風呂敷包みを、ドサリと置いた。
「何だそれは」
「着物に寝衣に枕掛けに毛布に、それから——」と包みを開けにかかった。
「呆れたね」私はちょうどこちらを向いた友人の顔を見た。友人は変に目を光らせ、
「うむ」とうなるような声を上げた。そして、
「君どうだこれは」と私を見た。私はある感じに迫られたが、笑って、
「こいつはただ暢気なんだよ。——まあ、いいや、持っ

て来たものなら、ちょうど間に合う——」
「持って来ちゃいけなかったの？　だってこんなもの、清水さんとこにないでしょう、余分」
「ああ、持って来てよかったよ、重かったろう」
「重いのは平気だったけど、もう夜中でしょう、随分怖かったわ、ここへ来る道」
「じゃア君、寝よう。今日は疲れた」私は真先に横になった。芳枝は持って来たものを、これ清水さん、これあなた、これあたしと分け、すぐ寝支度にかかった。やがて横になったが、しばらくするといびきを立て始めた。
　私は黙って天井を見ていたが、疲れながらちょっと眠れそうでなかった。やはり上を向いて眼は閉じている清水も同じらしいと思っていると、彼が上向いたまま、
「君は、暢気だ暢気だと云うが——」と云った。
「それや、それだけで片づけてはいないよ。しかし暢気で簡単坊主なことは事実さ。ただそれだけに僕としてはなおのこと——何と云うかなア」
「若いんだし。……何とかして君の為事を早く仕上げたいもんだよ。刻下の急務はそれだ」
「そうなんだ。それがねえ、今の僕は——碁や将棋で後手後手と廻っていじめられる、あれだ。何とかして先手さえ取れば——」
「うん」
　しばらくして清水も寝入った。
　二三日経って、清水の隣室が空いた。夜具付きで借りることにし、私たちはそこへ移った。
　窓の下の広場は三つに仕切られ、野球部の合宿に面した側は全くの空地で学生や子供たちの小さな球場になり、某美術学校に面した側は、テニスコートとベビーゴルフ場だった。ある時、清水の部屋から二人の学生の球投げを眺めていたことがあったが、学生は清水の知人らしく、我々を見つけると、グローヴを高く上げて見せた。
「やろうと云うんだが、どうだ。道具はある」清水が腰を浮かすので、出かけることにした。芳枝もついて来た。
　私はそういうものを手にするのは十年このかたないことゆえ、強く投げると肩を痛くすると思い、ミットを持つことにした。しかし、この遊びでしばしば怪我した経験ある私は、受ける方でも臆病で手が延びず、落球やバスボールばかりするのだ。すると見ていた芳枝が、
「下手下手。見られん」と国言葉で云った。
「生意気云うな。やって見れば楽じゃないんだ」
　出来ると云うゆえ、冗談にミットを渡すと、右へはめかけたのを左になおし、皆の方を向いて構えた。皆笑って相手にしなかったが、試しにと清水が投げたのを正確

に取った。球はスポンジでなく、本ボールと云われる固いものだった。私もグローヴをはめ、二三べん投げて見た。

「冗談じゃないね。君よりうまいぜ」清水が真顔で云った。私もそう思っていたところなので、「おかしな奴だな、オイ、これやったことがあるのか」訊くと野球はしたことないが、学校でバスケット・ボールの選手だったと云う。多少安心して、少しずつ強い球を送って見たが平気ゆえ、今度は強いぞと力をこめて投げるとそれも取った。ほとんど落球しなかった。

私はふと気づいた。芳枝は妊娠しているのだ。しまったと思いすぐ止めさせ、部屋へ帰って休めと云いつけたが、不服らしい顔つきだ。皆に知れぬよう腹へ手をやりその恰好をして見せると、頭を手で押え、すぐ帰って行った。

やがて私たちも宿に帰った。清水の無駄口を聞き流していた私が、

「しくじったよ。こいつが暢気すぎたんだ」云うと、その調子から清水も、

「何だ」と真顔になった。私の意地の悪い眼つきを浴び、芳枝が妙な顔していた。

「子供が出来てるんだ」

「そうか、それは——」めでたいとも弱ったろうとも云えず、ちょっと間を置いて「悪いことをしたな」

「今ちょうど大事にしないといけない時期らしい。こないだこいつが何かを読んで、自分で云ってたばかりなんだ。俺もうっかりしていたが、第一本人が注意しなけりゃいけない。もうお転婆は止すんだぜ、いいか」

「うん」と情けない顔だ。

夜、芳枝は常の通りすぐ寝ついたが私はなかなか眠れず、隣室の清水の、何か頁を繰る音を聞いていたが、やがてそこへ出かけて行った。

清水はバットに火をつけ大きく吸って吐き出すと、「ふふふふ」と笑い、「今日はなかなか演じたね」と云った。

「演じた。しかしどうもおかしな奴だよ」云うと私もおかしくなり、ちょっと笑いが止まらなかった。「盲者蛇に怖じずてのはあれだね」と球投げのことを云い、何事もあれだとまた思った。少し書きにくいが書くと、妊娠についてもそれが云えるのだ。今子供が出来ることは何よりも困るゆえ、芳枝にも、そのことを云い、条件が整うまでとして、ある方法によることを承知させた。それが、腹からの承知でなかったのだ。ある時芳枝が密かに用具を不完全なものにしておいたのを私は気づかなかった。後で不審に思い、あるいはと問いつめると、どうしても欲しくて、と泣きながら詫び入るのだった。私は考



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo